

タイトル	フリードリヒ・シラー『ドン・カルロス スペインの 皇太子 演劇的詩』 一八〇五年最終版 第五幕
著者	北原, 寛子; KITAHARA, Hiroko
引用	北海学園大学学園論集(180): (1)-(29)
発行日	2019-11-25

フリードリヒ・シラー

『ドン・カルロス スペインの皇太子 演劇的詩』

一八〇五年最終版 第五幕

北 原 寛 子 訳

第一場

王宮の一室、広い前庭と格子戸で隔てられており、前庭では見張りたちが行ったり来たりしている。

カルロスは机に座り、両腕で頬杖をついて、まどろむかのようにしている。部屋の奥には、一緒に閉じ込められている士官が数人いる。マルキ・フォン・ポーザが、彼に気づかれることなく入って来て、静かに士官たちと言葉を交わすと、彼らはすぐに立ち去る。マルキはカルロスの間近に来て、しばらく黙ったまま悲し気に彼を見つめる。ついに彼が身動きすると、カルロスは夢想から覚める。

カルロス 「立ち上がって、マルキに気づき、ぎよつとなる。それからしばらく彼を目を大きく開いて見つめ、なにか考え事をするかのように額を手で拭う。」

マルキ 僕だよ、カール。

カルロス 「彼に手を差し出し」

君はそれでも、僕のところに来るの？

とてもありがたいことだね。

マルキ 思ったんだ、

君はここで友達が必要なんじゃないかって。

カルロス 本当に？ 君は本当にそう思ってたの？ ほら！

嬉しいよ——言葉では言えないくらい嬉しいな。ああ！

君が僕の味方のままだって、よくわかっていたよ。

マルキ 君のためにもそうしたんだ。

カルロス

そうなの？

ああ、僕たちはおたがいによくわかっているね。そういうのは好きだな。このいたわり、この親切は、

君や僕みたいな、偉大な魂の持ち主にふさわしいね。

僕が言い張ることが不当で不遜だったとしても

君はそのせいで正当な望みも拒否する必要はないよね？

徳というものは厳しいものだとしても、決して残酷ではないし、

非人間的でもありえない——君には高くついたね！

ああそうだ、思ったよ、よくわかる、どんなにか

君の優しい心が血を流したかが、

君がいけにえを祭壇に供えた時にね。

マルキ

カルロス！

何を考えているんだい？

カルロス

僕がやらなくていけなかったけれど、

できなかったことを、君こそが、今やり遂げるんだ——君が

スペインの人々に黄金時代を贈るのだよ、

それは僕に期待されて無駄だったものだ。僕に関しては

終わってしまった——永遠に終わりで。これは

君はわかったね——ああ、この恐ろしい愛が

僕の心に早々に実ったものをすべて

取り返しがつかないほど奪い去っていく。僕は

君の大きな希望のために死んだんだ。

摂理か偶然が、君のところへ

王様を導いた——これには僕の秘密という犠牲が求められ、

あの人は君のものになった——君はあの人の天使になれるんだ。

僕にとっては、もう救いはないよ——おそらく

スペインにとつても——ああこうなると、僕が

慌てて見えていなかったことほど忌々しいものはないよ、

こんな日が来るまで、

君が——立派であり、繊細だということがね。

マルキ

違うね！これは

これは僕が予想したことじゃないな、

友達の広い心が

僕の慎重さより

洞察力があるだろうだなんて。僕の

建てたものは崩れてしまった——僕は君の心を忘れていた。

カルロス それにもし君に、あの方に、こんな運命に合わせないこと

が

可能だったとして——ねえ、だったら

言葉では言えないほど君に感謝しただろうに。

僕一人で背負えなかったかな？ あの方は

第二の犠牲者になってしまうのか？——でもそれは黙っていよ

う！

僕は君を非難したくはないんだ。

王妃様が君に何の関係があるんだ？ 君が

王妃様のことが好きなの？ 君の厳格な道徳心が

僕の愛のちよつとした悩みを聞かずにおれないの？

ごめん——僕が間違っていた。

マルキ

君の間違いさ。

でも——この非難のせいじゃないよ。僕が

誰か一人のためになるなら、僕はみんなのためになることになる

——

そうだったら僕は、こんな風には君の前に立っていなかったね。

「カルロスの手紙入れを取出す。」

ほら、

あの手紙のいくつかがここにあるよ。

僕にためらいながら託したやつさ。さあ、

受け取って。

カルロス 「いぶかし気に、手紙とマルキをきよろきよろ見ながら」

なんだって？

マルキ 返すよ。

今となつては君の手元のほうが

僕が持っているより安全だろうから。

カルロス

どういうことだ？

では王様はこれを読まなかったの？ 全然

見なかったの？

マルキ

これらの手紙を？

カルロス 君はあの人に、全部見せたのではないの？

マルキ

僕があの人に一つでも見せただなんて、

誰が君に話したの？

カルロス 「非常に驚きながら」

あり得るかい？

レルマ伯爵だよ。

マルキ

あの人が言ったのか？——そうさ！ では

みんな、みんなもうわかっているね！ 誰が

こんな事態を予測できただろう？——レルマかい？——違うね、あゝ、あの男は嘘をつくことができない。全くその通りだよ、他の手紙は王様のところにある。

カルロス 「マルキを長い間言葉が出ないほど驚いてみつめ、」

そのせいで僕はここにいるの？

マルキ

用心のためだよ、

君がひよつとしてまた、

エボリみたいな人を、信頼する相手に

選んでしまうかもしれないから。

カルロス 「夢から覚めたかのように、」

は！——そういうことか！

今になつて——今になつて全部わかったよ——

マルキ 「扉に近づき」

誰が来るんだ？

第二場

アルバ公爵。先ほどと同じ人物たち。

アルバ 「うやうやしく皇子に近づく、マルキに対しては、この登場

の間ずっと背を向けながら、」

皇子様、あなたはご自由の身です。王様が私を、

あなた様に告げるために、遣わされました。

「カルロスはマルキを不思議そうに見つめる。全員黙っている。」

また私は

最初にこの恩恵に、賜れますことを
非常に光榮に存じております——

カルロス 「両者をきわめて不思議そうに見つめる。しばらくの間
をあけて公爵に向かい、」
私は

逮捕され、自由を言い渡されたが、
どうしてそうなったのか
さっぱりわからない。

アルバ 誤認逮捕でございます、皇子様、

私が知る限り、何と申しますか、一種の

——ペテン師が、王様を誘惑してしまいました。

カルロス でも私がここにいるのは、

王様の命令に基づいてだろう？

アルバ はい、王様の

誤認によるものでございます。

カルロス それは本当に

残念なことだな——でももし王様が

失策をなさったならば、王様にお伝えしてくれ、

ご自身でこの間違いをお正しくくださいと。

「マルキと目を合わせようとし、公爵に対しては、胸を張って見下
す。」

皆は私をドン・フィリップ様の息子と呼びます。
中傷と好奇心のまなざしが私に注がれています。

陛下が義務でなさったことを、

恩寵に感謝するかのようにしたくはありません。

さらに私は、身分制議会の裁きの前に

立つつもりでもあります——私の剣は

そのような手からではないと受け取りません。

アルバ
もし私に
陛下、

ご同行賜れましたら、

王様は、この正当な要求を遅滞なく満たされることでしよう——

カルロス 王様か、彼の町マドリードが、

私をこの牢屋から導くまでは、

私はここにいる。この答えを

伝えなさい。

「アルバは立ち去る。彼がしばらく前庭にとどまり、命令をしてい
る姿が見えている。」

第三場

カルロスとマルキ・フォン・ポーザ。

カルロス 「公爵が立ち去ったのち、期待と驚きに満ちてマルキに
向かい、」

あれは何なの？

説明してくれ。君は大臣ではないのか？

マルキ ご覧のように、僕はそうだったよ。

「カルロスに向かって進みながら、大きな動作。」 ああカール、

効いてきたよ。効いた。上手きいった。

もうできたよ。これを成功に導いた

無限の力に感謝を。

カルロス 成功？ 何が？

君の言葉がわからないよ。

マルキ 「カルロスの手を取って」君は

救われた、カール——君は自由だ——そして僕は——

「彼は考え込む」

カルロス そして君は？

マルキ そして僕は——君を胸に抱きしめよう、

初めて、しっかりとすべての権利でもって。

僕はこのために、自分にとって貴重なものをすべて、

すべて、犠牲にしたんだ——ああカール、この瞬間は

なんと甘美で、なんと偉大なことだろう！僕は

自分に満足だよ。

カルロス 君の表情は

なんと突然変わってしまったのだろうか？ 君の胸は

誇りに膨らみ、君のまなざしはきらめいている。

マルキ

僕たちはお別れしなくてはならないんだ、カール。驚かないで。

ああ、男らしくしてくれ。君が何を聞こうとも、

約束してくれ、カール、我慢しきれないほど悲しまないで、

偉大な心の持ち主にふさわしくないよ、この別れは

僕には辛いものだ——君は僕を失うよ、カール——

何年も——愚か者たちはこれを

永遠と呼んでいる。

「カルロスは手を引つ込め、彼をじつと見つめて、答えない。」

男らしくするんだ。僕はとても

君を頼りにしているよ。最後の時間とおどしく呼ばれる

この不安な時間を君と耐え抜くことを、

避けるわけにはいかなかったんだ——そうさ、

言ってしまうるか、カール？僕はこれを

とても楽しみにしていたんだ——さあ、腰を下ろそう——

とても疲れてくたかなんだ。

「彼は、死んだように固まっているカルロスを近くに引き寄せ、無理やり座らせる。」

答えてくれないんだね？——手短にしよう。 気が遠くなっているの？

君と最後に、カルトジア会修道院で会ったあの日、後から

僕は王様に呼ばれたんだ。上手きいったことは

君が知っての通りで、マドリッド中知っている。君が知らないの

は、

君の秘密が王様に密告されていたこと、

王妃様の手紙入れで見つかった手紙が、

君に不利な証拠であること、

僕がこれをあの方の口から直接聞いたこと、
そして——僕があの人に信頼されていることだよ。

「ここで、カルロスの答えを聞こうと話を止める。カルロスは沈黙したままだいる。」
そうだよ、カール！

僕の唇が、僕の忠誠心を破ったのさ。

僕自身が陰謀を操り、君の

失脚を準備したんだ。はっきりと大きな声で

事実がすでに示している。君に釈放を言い渡したのは、

遅すぎだった。あの方がきつと僕に復讐してくれば、

それで全部ということになる——だから

君にしっかりと奉仕するために、僕は君の敵になったんだよ。

——僕の言うことを聞いていないの？

カルロス 聞いているよ。続けて。続けて

マルキ これまでのところ、僕は責められてはいない。でもじきに、

王様の新たな寵愛を受けたという

尋常ではない威光が僕を裏切ることになる。評判は

さつき分かったように、君の耳にも届いていた。

でも僕は、偽りのやさしさに魅了され、

尊大な思い込みに目をくらまされ、君抜きで

冒険を完結させようとした、友情に対して

僕の危険な秘密を秘匿しようとしたんだ。

これはあまりに軽率だったよ！ もう少しで

失敗するところだった。わかったよ。早急だったのは

自信があったからさ。ごめんよ——この自信は

君の永遠の友情あつてのことだったのだよ。

「ここで黙り込む。カルロスはじつとしていたが、活発に動くようになる。」

心配していたことが起きている。君は

でっ上げの危険に怯えることになってしまった。

王妃様は血を流している——噂が響き渡る宮廷の

恐ろしいこと——レルマ伯の

悲しいほどの世話好きさ——おまけに

僕の理解不能の沈黙、すべてが

驚いている君の心を、狼狽^{ろうばい}させた——動揺しているね——

君は僕を失ったものとしてあきらめた——でも、

君の友情の誠実さを疑うこと自体は、とても高貴なことで、

その消滅を大げさに飾り立ててしまったのだね、

そうしてようやく、君は友情がうわべだけだったと言いつつ、

だって君は友情をうわべだけ敬つても許されるのだから。

唯一の友の元を去って、君は

エボリ公女の腕に身を投げた——

運の悪い奴だな！ 悪魔の腕にとは。

だって君を密告したのは、その女だったんだよ。

「カルロスが立ち上がる。」 君が

急いでいるのが分かった。悪い予感が

僕の心をよぎった。僕は君を追った。遅すぎた。

君はあの女の足元にいる。君はもう

すべてを話してしまっている。君には

もう救われる道はないよ――

カルロス

いいや！ 違うよ！ あの人は

動揺していたんだ。君は思い違いをしている。彼女は確かに動揺していたよ。

マルキ 僕の感覚では、絶望的な状況になったよ！

駄目だ――駄目だ――出口はない――救いはない――どこにもない！ 疑いで

僕は狂暴になるよ、獣になる――とある女の胸に剣を突き立てた――今こそそうすべきだ――今になって太陽の光がこの心に刺してきた。

「もし王様のことを勘違いしていたら？ もし僕が作戦を練っている人、責任者当人に見えたら？

きつとそうか、それとも違うか！――あの方には十分だ、そう見えるというだけでフィリップ様には十分なんだ、なぜなら忌まわしいことだから！ そうさ！ 僕はあえてそうしている。

ひよつとして、思いかけずあの方に当たってしまった雷が、暴君をおどろかせたのだろう――そして

僕はまだ何を求めているのか、とあの方はお考えだろう、カールはブラバントに逃走する時間を稼いだのだな」

カルロス それで――君はそうするつもりだったの？

マルキ

僕は

ヴィルヘルム・フォン・オラニエン宛に、

僕が王妃様を愛していると書いたよ、君に対して王様が誤って抱いた疑いを、逃れさせることにはうまくいったよ

――僕が、王様ご自身を利用して

王妃様に自由に近づける道を見つけたとも書いた。さらに、見つかったしまったときに備えて、

君が、僕の情熱を手本として、

エボリ公女の元に急ぎ、ひよつとして

彼女の手を通して王妃様に警告をしようという感じに――でもすべて無駄になってしまったので、

ブリュッセルに僕を追放してくれたらいいのに――この手紙を――

カルロス 「驚いて彼の言葉に割って入り、」

君は郵便を信頼したんじゃないだろうね？ 知っているだろう、すべてのブラバントとフランドル行きの手紙は――

マルキ 王様のところに届けられる――ことの

道理に従って、タクシスは自分の義務を

すでに果たしたよ。

カルロス 神様！ では僕は負けてしまった！

マルキ 君が？ なんで君が？

カルロス 運の悪い奴だな、君も

一緒に負けだよ。このとてつもない詐欺で

お父様は君を許すことはできないよ。

駄目だ！ あの人はこれを決して許さないさ！

マルキ

詐欺だって？

君は気が散っているよ。よく考えて。誰があの方にこれは詐欺だって言うのかい？

カルロス 「マルキの顔をじっと見つめて」

誰が、だって？

僕自身だよ。

「そのまま行こうとする。」

マルキ 君は我を忘れている。戻るんだ。

カルロス

お願いだから。止めないでくれ。

僕がここにいる間に、あの人はもう

人殺しを雇っているよ。

マルキ

だとしたらますます時間が貴重な。

まだもつと言わなきゃいけないことがあるよ。

カルロス

何を？

あの人がまだすべてをどうにかする前に――

「彼はまた行こうとする。マルキは腕をつかんで、彼をじっと見つめる。」

マルキ

聞くんだ、カルロス――僕も

せっかちで、几帳面すぎたかな、

だって君は僕のために血を流した――あの少年だろ？

カルロス 「感動して立ち止まり、すっかり驚いて彼の前に立ち、」

ああ、ちゃんと気をつけなくちゃね！

マルキ

フランドルのために自分を大事にするんだ！

王国が君の使命だよ。君のために

死ぬことが僕の使命だ。

カルロス 「マルキに歩み寄り、彼の手を取り、心から感動して、」

違うよ！ そうじゃない！

あの人は――あの人は我慢できないんだよ！ こんなにもたくさんの

崇高さに耐えられないんだ！――僕は

君をあの人のところに連れて行こう。腕を組んで

一緒にあの人のところに行こう。お父様、と僕は言うんだ、

これは、ある人物が彼の友達のためにしたことです。

あの人は感動するさ。僕を信じて！ あの人は

人間らしさがないということはない、僕の父上はね。そうさ！

きっとこれはあの人を感動させるさ。あの人の目は

温かい涙であふれて、君と

僕をあの人は許す――

「格子戸を通して銃が撃たれる。カルロスは飛び上がる。」

は！ 誰を狙ったんだろう？

マルキ 思うに――僕だね。

「倒れる。」

カルロス 「苦痛の叫びをあげ、彼の隣で床の上にかがみこみ、」

ああ、天の

お慈悲を！

マルキ 「とぎれとぎれの声で、」

あの人は素早いね――王様は――

もつと時間が――かかってはしかなかったな

――自分が助かることを考えて――

聞いているかい？――自分が助かることだよ――お母様は

すべてをご存じだ——僕はもう駄目だ——

「カルロスは死んだように遺体の傍に横たわったままでいる。しばらくして、王がたくさんの重臣に伴われて入って来て、この光景に後ずさりする。全体に深い間。重臣たちは二人を取り囲んで半円になって立ち、王と息子を交互に見る。カルロスはまだ生きた気配もなく横たわっている。——王は彼を黙ったまま考え込んで見つめる。」

第四場

王。カルロス。アルバ、フェリア、メディナ・シドニアの各公爵。パルマ公子。レルマ伯爵。ドミンゴと多くの重臣たち。

王 「好意的な調子で、」

お前の願いは

聞き届けられた、我が皇子よ。ここに余は参った、

自ら、我が国のすべての重要人物たちとともに、

お前に自由を告げるために。

「カルロスは見上げ、夢から覚めたようにあたりを見回す。彼の視線はまもなく王にとどまり、また死者を見つめる。彼は返事をしない。」

お前の剣を

引き取りなさい。やり方が早急すぎた。

「王はカルロスに近寄り、手を差し出し、立ち上がるのを手伝う。」
我が息子が定位置についていない。立ちなさい。

お前の父の腕の中に来なさい。

カルロス 「意識のないまま、王の腕を受け入れる——しかし突然じっと考え込み、動きを止め、王をじっと見つめ、」

あなたは

殺人のにおいがする。抱きしめるなんてできない。

「カルロスは王を突き返し、すべての重臣たちが身動きする。」

なんだよ！ そんなに当惑してそこに立っているんじゃない！

僕がそんなとんでもないことをしたとでも？ 天の

聖別されたものを犯したとでも？ こわがることはない。

この人には触れていない。お前たちは

この人の額に烙印が見えないのか？ 神様が

この人に刻印したんだ。

王 「素早く立ち去りつつ、」

ついてきなさい、我が重臣たち。

カルロス どこへ？ 離れないで、陛下——

「彼は王を、両手でもって力づくで引き留め、片手で王が持っていた剣をつかもうとする。剣が鞘からさっと抜ける。」

王

剣を

お前の父親に突き刺すのか？

すべての居合わせた重臣たち 「自分たちの剣を抜き、」

王殺しだ！

カルロス 「片手で王をつかみ、反対の手で拔身の剣を持ち、」

お前たちの剣を突き刺すがいい。何が望みなんだ？ お前たちは僕が狂っているとも思うのか？ いいや、僕は狂っていない。そうだとしたら、お前たちはよくないことをしていることになるぞ、

僕に、この剣の先にこの人の命がかかっていると
思い出させたのだからな。お願いだから
離れていってくれ。僕の今の気分は、

媚を売りたいんだ——だから離れていってくれ。僕が
この王様と申し合わせたことは、

お前たちの忠誠の誓いとは関係がない。さあ、この人の指が
どんなふうに血を流すか見るがいい。よく見るんだ！

見ているか？——ああ、こちらに来て見るんだ——これを、
この人はやってのけたのだ、立派な芸術家だよ！

王 「心配して彼の周りに集まって来ていた家臣たちに向かって、」

お前たち、

下がちなさい。皆は何に怯えているのだ？——我らは

息子と父ではないのか？ 余は期待しているのだ、
いかなる恥ずべき振る舞いに対して、自然が——

カルロス

自然だって？

そんなものは知らないな。殺人が今は合言葉だ。

人間らしさの絆が真つ二つになった。あなたは自分で、
それを引き裂いたのです、陛下、自分の領土でね。

僕はあなたが高めたものを敬うべきかな？——ほら、みんな見
ろ！

ここで見るんだ！ 殺人が起きたことはなかった、

今日までは——神はいないのか？ なぜだ？ 王様たちは
神の創造した世界で、そんな風に治めているのだろうか？

僕が聞いているのは、神はいないのか？だ。人類の母たちが
生まれてこの方、ただ一人——一人が

こんなにも不当な死に方をした——あなたもわかっているでしょ、

自分が何を、したかを？ いいや、この人はわかってない、
わかっていない、自分が命を盗んだことを、

この世から、自分がこの世紀全体に関わるよりも
大切に高貴で、貴重だったものを。

王 「穏やかな調子で」

もし余があまりに早急すぎたとして、
その者のために、余が、

責任を取ることが、お前にふさわしいだろうか？

カルロス

なんだって？

そんなことが可能だろうか？ あなたはまだ、
死んだ人が僕にとってどんな人だったか、言い当てていませんよ

——ああ、みんなこの人に言うんだ——この人は

何でも知っているのだから、困難な謎を解くお手伝いをするんだ。

死んだ人は僕の友達だった——お前たちは知りたいか、
なぜ彼が死んだのかを？ 僕のために死んだんだぞ。

王 は！ うすうす感じた通りだ！

カルロス

血を流した君、許しておくれ、

そんなことを聞かせて、神聖さを穢してしまってもこの大した人間通の人は、自分の陰気な知恵を若者の鋭い洞察力が上回ったところで、

恥ずかしさのあまり倒れてしまえばいい。

そうですね、陛下！ 僕たちは兄弟だった。自然が鍛え上げたよりも高貴な絆で結ばれた兄弟でした。

彼の素晴らしい人生は愛でした。僕への

愛は、立派に美しく死ぬことでした。彼は僕のものだった、

あなたが彼の敬意を受けて偉大なことをなし、

彼の冗談じみた雄弁さが

あなたの誇り高い巨大な精神と戯れていた時にはね。

彼を支配するとあなたは言った——従順な

手先になることが、彼のより高い計画だったのです。

僕が捕らえられたのは、彼の友情が

考えつくした結果でした。僕を救うために、

オラニエン宛の手紙に書いたそうですが——ああ神様！

彼が人生で初めてついた嘘でした。

僕を救いだすために、彼は命をなげうち、

死ぬことになったのでした。あなたは彼に

愛顧を贈りましたが——彼は僕のために死んだんです。あなたは

心と友情を彼に押し付けましたが、

あなたは王笏を、あなたの手のおもちゃにしていた。

彼はそれを投げ捨てて、僕のために死んだんです！

「王は身動きせずに立っており、視線は床にくぎ付けになっている。

すべての重臣たちが、困惑し、おどおどと王を見ている。」

あり得たでしょうか？

こんな大雑把な嘘を

あなたが信じてしまえるなんて？ 彼はきつと、あなたのことを

低く評価していたはずで、だって彼はあなたの下で

こんな馬鹿げた愚ふざけに手を出したのですから！

あなたは、彼の友情を求めて媚びるということをあえてしました、

そしてこのちよつとした実験に負けてしまったのです！

ああ、いや——違う、あなたのためには何も無かった。あなたに

は

人間は存在しません！ 彼があらゆる知恵を絞って、あなたを

追い出したときには、これを彼自身は実によくわかっていました。

この繊細な弦の音は、あなたの鋼鉄の手の中で砕けました。

あなたは、彼を殺害することしかできなかったのです。

アルバ 「これまで王から目を離すことはなく、表情を見てわかる

ほどの動揺ぶりでここまでの動きをじっと見ていた。ようやく王

に恐る恐る近づき、」

陛下——このような死の静けさはやめましょう。

周りをご覧ください。私共とお話ください。

カルロス

あなたは、

彼にとつてはどうでもよかった。彼の分け前を、

あなたはとつくの昔に得ていた。多分ね！ 彼はあなたを

まだ幸せにできただろうに。彼の心は、あなた自身に

溢れかえるもので楽しませられるくらい、豊かでした。

彼の精神の碎片を、あなたは、
神にすることもできたでしょうに。あなたは自分で自分を
盗んだのですよ——これほどの
魂を弁済するとは、
何を差し出されるつもりですか？

「深い沈黙。重臣たちの多くが目をそらしたり、外套で顔を覆った
りしている。」

ああ、ここに集まっているお前たち、驚きと
動揺で黙り込んでいるお前たち——この言葉を
父であり王である人に向かって

述べている若者を非難しないでくれ——ここを見ても！

僕のために彼は死んだのだぞ！ お前たち、涙はあるか？

血は流れているのか、お前たちの血管には、煮えたぎる金属でも？
ここを見るんだ、そして僕のせいにするな。

「彼はもつと落ち着き、冷静になって王に向き直る。」

おそらくあなたは、

この不自然な出来事がどのように収束するか

待ち受けているのですね？——ここに僕の剣がある。あなたは

これまで通り僕の王様だ。僕が

あなたの復讐に怯えるとお考えですか？ 僕も

殺してください、一番高貴な人物を殺したようにね。

僕の人生は無くなってしまった。わかります。今となつては

僕にとって生きるとは何なのでしょう？ この世界で

僕を待ち受けているすべてを諦めます。よその人たちの中から

息子を探してください——
そこに僕の世界がある——

「彼は遺体のかたわらに屈み、以下の出来事には関与しない。そう
こうするうちに遠くから多くの人間の声や押し寄せる雑多な音が
聞こえてくる。王の周りには深い沈黙がある。彼の目は周囲全体
を見渡すが、誰も彼と目を合わさない。」

王
さあ、誰も

答えたくないのか？——皆、下を向いている——皆、顔を
覆っている！——余の判断は話した。

お前たちの黙っている表情から

読み取れるぞ。我が家臣たちは、余を

有罪と裁いたのだな。

「引き続き沈黙——騒ぎが近づいてきて、大きくなる。周りを取り
囲んでいる重臣たちの間から、何かを言う声が響いてくる。重臣
たちは互いに困惑した身振りを示している。とうとうレルマ伯爵
が、静かにアルバ公爵の肩をたたく。」

レルマ
実に！ これは嵐です！

アルバ 「静かに」 これを危惧していました。

レルマ 人が押し寄せて来ます。来ています。

第五場

親衛隊の士官。先の登場人物たち。

士官 「差し迫ったように、」

反乱だ！

王様はどちらに？

「人々をかきわけ、王の元へとたどり着く。」

マドリード中が武装しています！

数千人規模で、怒った

兵士、暴徒が宮殿を取り囲んでいます。カルロス皇子様が、

拘束された、と噂になっています。

お命が危険にさらされていると。民衆は

お元氣なカルロス様にお目にかかりたいと、さもなくば

マドリード中を火の海にするつもりです。

すべての重臣たち

「動きながら、」お助けしろ！ 王様を

お助けするのだ！

アルバ 「静かに、身動きせずには立っていた王に向かい、」

お逃げ下さい、陛下――

危険です――暴徒に誰が武装させたか、

まだわかりません――

王 「我に返り、立ち上がり、威厳を込めて彼らの間に進みながら、」

我が玉座はまだ大丈夫か？

余はまだこの国の王か？――いいや。

余はもう王ではない。この臆病者は泣いていて、

少年に弱腰にされてしまった。みんなが待っているのは

余から零れ落ちた合言葉だけだ。

余は反逆者たちに裏切られたのだ。

アルバ

陛下、

なんと恐ろしい幻想を！

王

あそこだ！

あそこに駆け付けろ！ きらきらした

若い王の前に跪くのだ――余は

もう何者でもない――ただの無力な老人だ！

アルバ

あそこへ

駆けつけるのだ！――スペイン人たちよ！

「皆は王の周りに駆け付け、抜いた剣を手に彼の前で跪く。カルロ

スは一人だけ残り、皆から離れて遺体の傍に残る。」

王 「自分のマントを引きちぎり、前に投げて、」

あの男に、

王の飾りを着せるのだ――余に踏みつけられた

亡骸がこれを着るのだ――

「気絶してアルバとレルマの腕に倒れる。」

レルマ

お助けを！ 神よ！

フェリア 神よ！ 何という偶然！

レルマ

意識を失っておられる――

アルバ 「王をレルマとフェリアの手に委ねながら、」

寝台に

お連れしてください。その間に私は

マドリードに平和をもたらしましょう。

「退場する。王は連れていかれ、すべての重臣たちが付き従う。」

第六場

カルロスは一人で亡骸のそばに取り残されている。しばらくして
ルードヴィヒ・メルカードが現れ、おずおずとあたりを見回し、し
ばらく黙ったまま皇子の後ろに立っている。皇子は彼に気が付かな
い。

メルカード

私は

王妃様のところから参りました。

「カルロスは再びそっぽを向き、答えない。」

私の名前はメルカードと申します——王妃様の

侍医でございます——そしてこれが

私の証拠の品でございます

「彼は皇子に、印章付きの指輪を示す——皇子は黙ったまま、同じ
姿勢でいる。」

王妃様は、本日

あなた様とお話がしたいと切にお望みです——重要な
用件が——

カルロス 大切なことは

この世にもう何もない。

メルカード おっしゃれますに、

マルキ・ポーザ様が残されたご依頼とのこと——

カルロス 「さつと立ち上がり、」 なんだって？

すぐに行く。

「彼と行こうとする。」

メルカード いいえ！ 今ではございません、皇子様。王妃様は
夜にお待ちしているはずです。すべての通路は

ふさがれており、そこでは全部の見張りが倍になっています。

誰にも姿を見られずに、宮殿のこの翼棟に踏み込むことは

不可能です。

あなた様がなんでもなさるといふのなら——

カルロス

しかし——

メルカード

ただ一つだけ、

皇子様、なんとか方法があります——

王妃様がお考えになりました。あなた様に

お伝えするものです——しかし大胆で、珍しいもので、

とても冒険的です。

カルロス

それは？

メルカード すでに長いこと、

噂がありまして、ご存じでしょう、

夜中に王宮の

丸天井の通路で、僧侶の格好をした、

亡くなられた皇帝の幽霊が歩き回っているという。

下々の者たちはこの噂を信じておりまして、見張りたちはこの役目を、その観察者と考えています。

もしあなた様が、この仮装をお使いになると決心なさるならば、

すべての見張りを自由に通り抜け、怪我することなく

王妃様のお部屋までたどりつくことができます。

そのお部屋はこの鍵で開けられます。あらゆる攻撃から、

あなたを、この神聖な姿が守るのです。しかし

この場で決心してください、皇子様。

必要な装束、仮面は

あなたのお部屋に準備してあります。私は

急いで王妃様にお答えを伝えなければなりません。

カルロス

時間は？

メルカード

時間は

十二時です。

カルロス

お待ちくださいと

伝えてくれ。

「メルカード退場。」

第七場

カルロス。レルマ伯爵。

レルマ

御身をお守りなさってください、皇子様。

王様は、あなたに非常にお怒りです。あなた様の自由が

命じられても——それはあなたの生命についてはありません。

これ以上私にお尋ねにならないでください。私は

あなた様に警告するために、秘かに抜けてきました。直ちに

お逃げ下さい。

カルロス

僕は全能者の

手の中にいるんだ。

レルマ

王妃様が私に、まさに

示唆なさいましたように、あなた様は今日中に

マドリードを去り、ブリュッセルへ逃げなくてはなりません。

遅らせないでください、ええ、駄目です！騒動は

あなたの逃亡に都合がいいです。この目的で、

王妃様が働きかけたものなのです。今は皆、

あなた様に対してあえて暴力を

振るおうとはいたしません。カルトジア会修道院では

郵便馬車があなた様を待っています、そして武器もあります、

もし必要に迫られた場合にです。

「皇子に短剣と小型ピストルを渡す。」

カルロス

ありがとう、ありがとう、

レルマ伯爵！

レルマ

あなた様の今日の出来事に

私は心の底から打たれました。そんなにも

愛せる友達はもうおりません！ すべての愛国者が

あなた様ゆえに泣いています。これ以上はお話しできません。

カルロス レルマ伯爵！ この今は亡き人は、あなたを

高貴な人と呼んでいました。

レルマ

もう一つだけ、皇子様！

ご無事な旅を。もっと良い時代が来るのでしよう、

そのころには私はもういません。

私の忠誠の誓いを、ここで受け取ってください。

「皇子の前で片膝をつく。」

カルロス 「レルマを引き留めようとする。とても感動して、」

そんな風には、

そんな風にはしないでくれ、伯爵——感動したよ——

泣くのは好きじゃないんだが——

レルマ 「カルロスの手を心で込めて口づけし、」

私の子供たちの王様！

ああ、私の子供たちは、死んでも構いません、

あなた様のためならば。私には許されていません。

私の子どもたちを見て、私を思い出してください——

平和になったらスペインに戻ってきてください。

フィリップ王の王座に上っても、人間でいてください。

あなたは苦悩を体験されましたから。お父様に対しては、

血なまぐさいことは何もさらないでください！——そうです、

血なまぐさいことはやめてください、皇子様！

フィリップ二世王は、あなたのお祖父様を王座から

追い出しました——そのフィリップ様が、今は

ご自分の息子に震えていらつしやる！——そのことを、

忘れないでください、皇子様——そうすれば天も味方します！

「素早く立ち去る。カルロスは反対側に行こうとするが、突然方向

を変え、マルキの亡骸に身を投げ、もう一度抱きしめる。それから

素早く部屋を去る。」

王の控えの間

第八場

アルバ公爵とフェリア公爵が会話している。

〈ドミンゴ。重臣たち。〉

アルバ 町は静かです。あなたが去るときに、

王様はいかがでしたか？

フェリア

きわめてひどい気分でした。

すっかり心を閉ざしていらつしやった。何が起きたとしても、

誰も傍から離そうとしないのです。マルキの

裏切りで、突然

全性格が変わってしまった。私たちは

あの方のことがもうわかりません。

アルバ 王様のところに参らなくては。今回は

そっとしておくわけにはいきません。

重要なことを見つけました。

今まさに、なされていることです――

フェリア 新しい

発見ですか？

アルバ 皇子様の部屋に忍び込んで、

胡散臭い好奇心で、マルキの死を

探ろうとするカルトジア会の修道僧が

私の警備で見つかりました。その男を拘留し、

取り調べました。死の不安に苛まれて、

大変価値のある書類を持っていると白状しました。

故人から皇子様の手に渡すように

託されたとかで――もし

故人が日没の前に皇子様に会えなければ、

渡しておくようにと。

フェリア それで？

アルバ 手紙によると、

カルロス様は、真夜中から明け方のうちに

マドリードをお発ちになると。

フェリア 何と？

アルバ 船が

カデイスの港¹に出港準備をしてあるそうで、

皇子様をフリッシンゲン²へお連れするためです――

オランダ諸州は、スペインの鎖を断ち切るために、

皇子様をお待ちしているのだと。

フェリア はあ！

なんとまあ、それは？

アルバ 他の手紙の情報では、

スレイマンの一艦隊がすでに

ロードス島を出港したとかで――秘密の盟約によると、

スペインの王様を地中海で攻撃するためだそうです。

フェリア そんなことがあるものですか？

アルバ まさにこのような手紙から

あのマルタ騎士の、最近ヨーロッパ中を回った旅のことが、

わかります。これは、北方のすべての勢力を

フランドルの自由のために武装させるよりも、

小さいこととは言えないのです。

フェリア あの男は、こんなだったのですね！

アルバ これらの手紙は結局、

¹ ジブラルタル海峡近くの大西洋に面した港町。
² オランダ南西部の大西洋に面した港町。

スペイン王国から永遠に
オランダ諸州を分けようとする

戦争全体の詳しい計画を示しています。何にも、全く
見渡せません、力と抵抗が予測されていますし、
この国のすべての源流、すべての力が

正確に挙げられています、

従うべきすべての原則に、

結ばれているすべての同盟まで。この計画は

悪魔じみている、しかし本当に——神業です。

フェリア なんと測りがたい裏切り者だ！

アルバ

さらに

この手紙では、

秘密の会合に触れられているのですが、それは皇子様が
逃走の晩に、母上様と
なさるというものです。

フェリア なんだって？ それは

今日ではないですか。

アルバ 今日の真夜中です。さらに、

その場合に備えてすでに命令を出してあります。

ご覧のように、切迫しており、一瞬も

無駄にできません——王様の

お部屋を開けてください。

フェリア 駄目です！ 入ることは禁止されています。

アルバ では自分で開けます——危険が増しているので、

図々しい行為も言い訳になります——

「扉に向かうとすぐに開かれ、王が出てくる。」

フェリア

は、王様ご自身だ！

第九場

王が先の人物たちに向かって。

皆は、彼の目つきに驚き、後ずさりしてうやうやしく真ん中を通す。

王は夢遊病者のように、起きたまま夢を見て歩いている——彼の着
衣と身なりはまだ乱れたままだが、これは先の狂気で陥った状態で
ある。ゆっくりとした足取りで彼は居合わせた重臣たちのかたわら
を過ぎ、一人一人をじつと見るが、それぞれが誰か分かっていない。
ついに彼は物思いにふけて立ち止まり、心の動きが次第に声を高
めるまで、目を床に下している。

王 この死者を余に引き渡せ。余はこの男が

また必要だ。

ドミンゴ 「静かに、アルバ公爵に向かって、」

話しかけてごらんなさい。

王 「先と同様に、」

この男は、余を甘く見て死んだのだ。余はこの男がまた必要なのだ。この男は余とは違うように考えているはずだ。

アルバ 「恐る恐る近寄り、」

陛下――

王 誰がここで話している？

「長いこと、あたりを見回す。」

皆は、余が誰か

忘れたのか？ どうして余の前で、

跪かないのだ、お前たち？ 余はまだ

王だ。屈服しているとかが見たい。

たった一人が余を軽蔑したからといって、

すべてが余を無視するのか？

アルバ あん男のことをこれ以上は、王様！

これよりもっと手ごわい新たな敵が

あなたの国の中心部で反乱を起こしています。――

フェリア カルロス皇子様――

王 あいつには友達がいて、あいつのために

死に捕らえられてしまった――あいつのために！ あの男は

余と王国を分けられただろうに！――どうやってあの男は

余を見下したのか！ そんなにも誇り高く

玉座からでも見下ろすことはない。あの男は

どれだけ征服のことが分かっていたのだ？

あの男が失ったものが、彼の苦しみを教えてくれる。だから

はかないことに、何も涙を流すことはない――
あの男はまだ生きている！

そのためにはインド一つだって与えただろうに。惨めな万能者だ、

墓の中でその腕を伸ばすことすらせず、ちょっとしたせつかさ
を

人間の命でましにすることもできない！

死者はもう立ち上がらない。余に

余は幸運だと言ってもよいのは誰だ？ 墓の中に

余を尊敬しないままにいたあの男が住んでいる。

生きている者たちが、余に何の関係がある？ 一つの精神、

一人の自由な男が、この世紀全体に立ち上がったのだ

――ただ一人――あの男は余を軽く見て、

死んだのだ。

アルバ 私たちはそのように、無益に生きるのです！――

墓所に参りましょう、スペイン人たちよ。さらにまだ、

死んでからでも、この男は、私たちから王様の心を盗んでいる。

王 「彼は腰を下ろし、頬杖をついて、」

では、あの男は、余にとつては死んだようなものなんだな！

余はあの男を、とても好きだったのだが、とても。あの男は、

息子のように大事だった。あの若者のところで

余にとつては新しい美しい朝が明けるかのようにだった。

余があの男のために大切にしていたものが、誰に分かるというの

だ！

あの男は、余の初恋だった。ヨーロッパ中が余を呪っている！ ヨーロッパは

余に悪態をついているかもしれない！

これゆえに、余は感謝されてしかるべきなのだ。

ドミンゴ

何に

取りつかれてるのか――

王 あれ男は誰に犠牲を払ったのか？

うちの息子みたいな小僧に？ あり得ない。

そうは思わない。小僧のために

ポーザのような人物は死なない。友情の貧素な炎が

ポーザのような人物の心を満たしたりはしない。その心臓は

全人類のために鼓動したのだ。あの男が求めたものは、

あらゆる来るべき種族のいる世界だった。

それを満たすために、あの男は玉座を見出したのだ――

見過ごしてしまったのか？ 人類に対する

この上ない背信行為を、ポーザは自分に

誤って割り振ったのか？ 違う。余はあの男をもっとわかつてい

る。

フィリップをカルロスのために犠牲にしない、ただ

年配者が、若者に、弟子に犠牲にされたのだ。

父親の暮れ行く太陽が、

日々の新しい勤めにもはや値しなくなったのだ。これを

その息子の次の日の出に延期したのだ――ああ、はつきりしてい

る！

余が死去することをみんな待っているのだ。

アルバ

これらの手紙を読んで、

元氣をお出してください。

王 「立ち上がって、」

あの男が誤算してしまうこともあるだろう。まだ、

まだ余はいるぞ。感謝するぞ、自然よ。余は

手足の腱に、若い力を感じている。あの男を

物笑いの種にしてやろう。あの男の忠義は

夢想家の妄想になってしまえ。

あの男は、狂人として死んでしまえ。あいつが転んで、

あいつの友人とその生きる世紀を押しつぶしてしまえ！

皆が、余がいらないことをどう耐えるか、見てみる。世界は

まだ余の晩年だ。余は

あの男をこの晩の間に役立てたいのだ、そうすれば余の後に

数十年間、この焼け跡には

植物が収獲できなくなるはずだ。あの男は

人類のために、あいつの偶像のために、余を犠牲にしたのだ。

人類は、余に対してあの男の償いをしろ！――今すぐ――

あの男の操り人形から始めることにしよう。

「アルバ公爵に対して。」 皇子に関しては

なんとあった？ そこを繰り返せ。これらの手紙は

余に何を教えてくれるのだ？

アルバ

これらの手紙には、陛下、

マルキ・フォン・ポーザがカール皇子様に

残したものが記されてあります。

王 「書類に目を通す。その際、周りにいる全員から鋭く観察される。王はしばらく読んだ後、それらをわきへ置き、黙って部屋を歩く。」

異端大審問枢機卿殿を

呼んできてくれ。一時間ほど

お時間を頂戴したいと伝えろ。

「重臣の一人が出ていく。王はこれらの書類を再び手に取り、読み続け、また脇へ置く。」

ということ、今晚なのだな？

タクシス

二時の鐘で

郵便馬車はカルトジア会修道院の前に停車します。

アルバ そして私が派遣した者たちは、

王冠の紋章の付いた様々な旅行用品が

修道院に運び込まれるのを目撃しました。

フェリア また、王妃様のお名前でかなりの人数が、

ブリュッセルで蜂起するために、

ムーア人の仲介人のところに

急いでいる模様です。

王 皇子が最後に目撃されたのはどこだ？

アルバ

マルタ騎士の遺体の傍です。

王 王妃の部屋に、まだ灯りは

ついているのか？

アルバ そちらはすべて静かです。また

部屋付きの侍女も、時刻通り

普段と同様に、退室したそうです。

最後にお部屋を出たのは、

アルコス公爵夫人ですが、

ぐっすり就寝中です。

「親衛隊の士官が入って来て、フェリア公爵を脇に引つ張つていき、静かに彼と話をする。フェリア公爵はアルバ公爵に向き直る。さらに数名が突き進んできて、ぶつぶつと話声をたてる。」

フェリア、タクシス、ドミンゴ 「同時に」

おかしなことだ！

王 なにがあつた？

フェリア 報告でございます、陛下、とても

信じられないような――

ドミンゴ 先ほど任務を開始したばかりの

二人のスイス兵が報告してきました――お伝えするのも

馬鹿げたことです。

王 さて？

アルバ お城の左側の翼棟で、

皇帝の幽霊が目撃されました。

堂々として厳粛な歩きぶりで彼らの傍らを

通ったそうです。まさにこの報告を

建物に配置されていた

すべての警備の者たちが裏付けています。さらに、

この姿は、王妃様のお部屋で姿を消したそうです。

王 どのような姿をして現れたのだ？

士官 晩年に、ユステ荘で

ヒエロニムス会修道士としてお召しだったのと同じ御装束です。

王 修道士？ 警備人たちは皇帝を生きていた時に知っていたのか？ そうでなければ、どこからそれが皇帝だとわかったのだ？

士官 皇帝のはずです、証拠は
お手にあった王笏です。

ドミング また、この幽霊は噂にあるように、これまでの頻繁にこの姿で目撃されています。

王 誰も

話しけなかったのか？

士官 そうする勇気のある者は誰もいませんでした。
警備の者たちは、お祈りを唱え、

うやうやしく真ん中を通したそうです。

王 それで王妃の部屋で

その姿は見えなくなったと？

士官 王妃様の控えの間です。

「一同沈黙。」

王 「素早く向きを変え」

お前たち、どう思う？

アルバ 陛下、私共は言葉が出てきません。

王 「しばらく考え込んだ後、その士官に向かって、」

親衛隊に

武装させ、この翼棟に通じる

あらゆる通路を閉鎖しろ。余はこの幽霊と話がしてみたい。

「士官は退場する。それに引き続き、小姓。」

小姓

陛下！

異端審問枢機卿様です。

王 「居合わせる人々に、」二人だけにしてくれ。

「異端審問枢機卿は、九十歳の老人で、目が見えない。杖にすがり、二人のドミニコ会修道士が介助している。彼が列を通るときに、すべての重臣たちが彼の前で身をかがめ、服の裾に触れようとす。彼は彼らに祝福を与える。全員退出する。」

第十場

王と異端大審問官。

長い沈黙。

大審問官

私は

王様の前にいるのか？

王 はい。

大審問官 もう想像も

できなかった。

王 かつてのように

新たにご登場いただきました。皇太子フィリップが
師に助言を乞うています。

大審問官 我が教え子のカールは、

偉大なお父上は、助言を必要としたのは一度もなかったが。

王 それだけ父は幸せ者でした。私は

人を殺しました、枢機卿様、それで安らぎがなくなり――

大審問官 何のために人を殺めたのだ？

王 他に例がない詐欺のためです――

大審問官 その詐欺は知っている。

王 何を知っているのだ？ 誰から聞いた？ いつから？

大審問官 数年前から、

あなたが日暮れになり出してから。

王 「よそよそしく、」 お前は

この人物をすでに知っていたと？

大審問官 その人物の人生は

異端審問所の牢獄サンタ・カサの神聖なる登録簿に

出生と終わりが記されている。

王 それであの男は自由に歩き回っていたのか？

大審問官 あの人物についていた縄は

とても長かった、しかし引きちぎれなかった。

王 あの男は、我が国の領土の外にもいたぞ。

大審問官

あの人物がどこにしようと、私には同じこと。

王 「不愉快そうに行きつ戻りつして、」 みんな余が

どんな手に捕らえられているのか、知っていたのか――

なぜみんな、余に思い起こさせることをためらったのだ？

大審問官 同じ質問を

お返しします――なぜあなたが、お尋ねにならなかったのですか、
あなたがこの人物の腕に飛び込んだ時に？

あなたはあの人物を分かっていたのです。あなたが一目見れば、

異端者の正体はわかった。――どうしてあなたは

この犠牲者を、神聖なる役所に秘匿するなどできたのでしょうか？

こんな風に、私たちと戯れたのでしょうか？ もし陛下が

隠匿者へと品位を落とされたなら――私たちの背後で、

私たちの最悪の敵と仲良くしていたのなら、

私たちはどうなるのでしょうか？ たった一人が、

こういう権利で、数万人を犠牲にする

恩寵を受けていいものでしょうか？

王 あの男は自分も犠牲になった。

大審問官 いいや！

彼は殺害されたのです――不名誉に！ 邪悪に！――

我々の榮譽のために、輝かしく流されるはずの血が、

暗殺者の手で飛び散ったのです。

人間なのは私たちの方でした――あなたは、何の権利があつて

教団の神聖な財産を侵害するのですか？

私たちによって死ぬために、彼はいたのです。

彼の精神が厳かなものを冒流するときに誇示する理性を、目に見るようにするために、

神は、あの人物をこの時代に必要だと遣わしたのです。

これが、私の熟考した計画でした。今は

すっかり実行されています、数年がかりの大仕事が！

私たちは盗みに遭いました、あなたには

血まみれの手しか残っていない。

王

情熱のあまり

度を越しました。お許しください。

大審問官

情熱？——フィリップ皇太子様が

お答えになつてゐるのか？ 私一人が

年を取ってしまったのか？——情熱とは！

「不機嫌に頭を振りながら、」

もし鎖につながれて歩くことになったら、

お国に良識を委ねなさい。

王

私はこうした事柄では

まだ新参者です。私のことを

我慢してください。

大審問官

駄目です！ あなたには満足していません——

あなたのこれまでの支配すべてに文句を言わせてもらいます！

あの頃、フィリップ王はどこにいましたか、

その確固たる精神は、

天上の北極星のように変わりなく、

永遠に自分の周りをまわっていたのですが？

過去がすべてあなたの背後で

沈んで消えたのですか？

この瞬間に、世界は

あなたが手を差し出したときとは

同じものではもうないのですか？

毒は、もう毒ではないのですか？ 善と悪の間を、

真実と偽りの間を、隔絶する壁は崩れてしまったのですか？

どういうおつもりなのです？ もし

決断できない瞬間に、六十年の法則が

女性の感情のように軟弱になるのならば、安定とは、

男らしい忠義とはなんですか？

王 私はある男の目を見て——死すべきものはかなさへ

引き返しすぎていました。

世界からあなたの心へ通じる道は、ますます細くなっています。

あなたの目は、光が消えています。

大審問官

この人間が、あなたに何だったというのですか？ あの人は

あなたが、まだ準備していないというのに、

あなたに、どんな新しいことを予定できたのでしょうか？ あなたは

たは

夢想者の感覚や革新というものを、こんなに分かっていないので

すか？

世界をよくしようとする人物たちが意気揚々と発した言葉は、

あなたの耳にはそんなに不慣れに響いたのですか？ もし

あなたの確信という建物が

言葉のせいで崩れるならば——お尋ねしなくてはなりません、

どんな考えで、あなたは数万人の弱い心の持ち主の

死刑宣告に署名しているのですか、

その人たちは薪の山を、それ以上悪いことはしていないのに

上ったのですか？

王 私は人間を欲したのです。これを

ドミンゴは——

大審問官 何のために人間ですか？ 人間は

あなたにとってはその数字で、それ以上ではありません。

私は帝王学の初歩を

白髪になった生徒に試問しなければならぬのですか？

地上の神を忘れてしまうことが必要なのです、

これが何かを拒んだときには——もしあなたが、

同情心を抱いてめそめ泣いたりしたら、あなたは

世界をあなたと似たような者たちのものと思うのですか？

知りたいものですね、どんな権利を

あなたは自分と似た者たちに示せるのですか？

王 「肘掛椅子に身を投げて、」

余は小さな人間ではない、それは感じている——あなたは

ただ創造主にのみが成し遂げられることをする人を求めているの

だね。

大審問官

いいえ、陛下、私はごまかされません。あなたは

見破られています——あなたは私たちから逃げようとしたので

す。

教団の重い鎖が、あなたを圧迫したのです。

あなたは自由に、一人になりました。

「ここで話を中断する。王は沈黙している。」

私たちは嗅ぎつけました——母親としてあなたを罰するだけで

満足している教会に感謝してください。

みんなが、あなたにやみくもにさせた選択は、

あなたを懲らしめることでした。あなたは教えられました。

今私たちの元に帰って来るのです——もし私が

あなたの前に立っているのではないとすれば——

生きた神のもとにいます！

あなたは明日になれば、そんな風に私に告白することでしょう。

王 こんなことを言うな！ 口を慎め、坊主！

もう耐えられない。こんな調子で

話しかけられるのを聞くことはできない。

大審問官 なぜあなたは、

サムエルの影を呼び出したのです？——私は

³ 旧約聖書で、サムエルはイスラエルの王サウルを聖別した。そして王に、主の命令に従わなければ罰せられると告げた。このたとえば、フィリップが教会の権力に反抗しても無駄だということを主張している。

二人の王にスペインの王冠を渡しました。

堅固に築かれた作品を後に残したいと思いました。

私の人生の成果が、失われていくのを見えます、

ドン・フィリップ様ご自身が、私の建物を震えさせています。

今は、陛下——何のために私は呼ばれたのですか？

どうして私はここに在るべきなのです？——私は

もう来るつもりはありません。

王 まだひと仕事あるぞ、

最後のが——そうすればお前は穏やかに辞去できる。

過ぎたことはもういい。平和は

我々二人の間で決めればよい——仲直りするか？

大審問官

もしフィリップ様が謙虚にお辞儀するならば。

王 「しばらくの間の後、」

余の息子が

反乱を目論んでいる。

大審問官

どのようにご決断なさいましたか？

王 なにも無しか——さもなくばすべてか。

大審問官 ここですべてとは、どのような意味でしょうか？

王 逃亡させるのだ、もし

死んでもらうことができれば。

大審問官

それで、陛下？

王 子供を血まみれで殺すことを正当化する

新しい信念を示してもらえないだろうか。

大審問官 永遠の正義を贖うために、

神の子は十字架でなくなりました。

王 お前は

ヨーロッパ中にこの考えを根付かせたいか？

大審問官

十字架を敬う限り、広く。

王 私は、自然に対しては

罪を犯すことになる——お前は、この大きな声も

黙らせてしまいたいのか？

大審問官

信仰の前では、

自然の声は無意味です。

王

私の裁判官の席を

お前の手に委ねよう——私は

引き下がっていてもいいか？

大審問官

彼を私に

引き渡してください。

王 余の唯一の息子だぞ——何に對して

集中すべきだろうか？

大審問官

むしろ支配の方です、

自由よりも。

王 「立ち上がりながら、」

意見が一致したな。来るんだ。

大審問官

どちらへ？

王 余の手から犠牲者を受け取るのだ。

「王は大審問官を連れて行く。」

王妃の部屋

最終場

カルロス。王妃。最後に王とその付き人たち。

カルロス 「修道士の衣服をまとい、手には今外したばかりの仮面を持っており、腕の下には拔身の剣がある。部屋はとても暗い。彼が扉に近づくと、扉は開く。王妃が就寝服で登場して、燃える灯りを手にしている。カルロスは彼女の前で片膝をついて、」
エリザベート様！

王妃 「静かな悲哀を込めて、彼の姿をじっと見つめながら、」
「というわけで、私たちはまたお会いできましたね？」
カルロス 「というわけです、またお会いできました！」

「沈黙。」

王妃 「落ち着こうとしながら」 お立ちください。私たちは泣いてなんていられません、カール様。あの亡くなった立派な人は、

狂ったような涙で弔われたくはないでしょう。涙は

小さな悩みに流れればいいのです！——あの方はあなたのために犠牲になりました！ あの方の高貴な命をあの方はあなたの命のために差し出したのです——この血は

妄想のために流されたというのでしょうか？——カルロス様！

私自身が、あなたに好意があるとお話ししました。

私が保証することで、あの方は、喜んでここから立ち去っていきました。あなたは私を

嘘つきになさったりはしないでしょう。

カルロス 「感激して、」

墓石を、私は彼のために

建てるつもりでいます、まだどんな王のためにもなかったようなものを——彼の遺灰の上に
楽園が栄えますように！

王妃 私もあなたにそうして欲しかったです！

これは、無くなった人の偉大な意見です！

彼は最後の願いとして、私を、

実行者を選びました。ぜひともお願いします。私はこの誓いを実現させるつもりでいます。

——そしてもう一つ別の遺言が、

亡くなった方から私に手渡されました——私はあの方に
お約束したのです——そして——どうして黙っていませんか？

あの方は、私に彼のカール様を託されました——私は

体裁を気にして抗いました——もう人間に怯えたくはありません、

一度は、お友達のように大胆でいたのです。私の心が語るべきです。純潔と、彼は私たちの愛を呼びましたつけ？

私はあの方を信頼していますし、私の心はもはや——

カルロス お終いまで言わないでください、王妃様——私は長くて重苦しい夢を見ていました。

私は愛していました——今、目が覚めました。過去のことは忘れてしましましょう！ここにあなたの手紙をお返しします。私の手紙を捨てて下さい。私からの興奮をもう怖がらないでください。もう過ぎたことです。純粋な炎が私の存在を清めてくれました。私の情熱は、死者たちの墓所に住みついています。死すべき定め of 者の欲望はもう、この胸に分け与えられていません。

「しばらく沈黙した後、彼女の手を取って。」

私は、お別れを告げに

参りました——お母様、とうとう分かりました、あなたを手に入れるよりも、より高い、望むべき財産があるのですね——短い夜が私の年月の緩慢な歩みに翼を付け、手遅れにならないうちに、一人前の男へと成熟させてくれました。この人生に残された仕事は、

あの人への思い出しがありません。私のすべての成果は終わってしまいました——

「彼は王妃に近寄る、彼女は顔を覆っている。」

私に何も、

おっしゃらないのですか、お母様？

王妃

私の涙に話を戻さなくても

いいのよ、カール様——これ以外に、どうしようもないの——でも、私を信じてください、あなたに驚嘆しています。

カルロス あなたは、私たちの絆の唯一の

信頼できる人でした——この呼び名において、あなたは世界中で、私にとって最も気の許せる存在です。

私の友情は、あなたには、昨日まで私の愛が

他の女性に捧げられていた程度に、ごくわずかしが捧げられません

——しかし、王様の未亡人は、私には神聖でいてください、慎重でいることが、私を玉座に導くのです。

「王は、大審問官と護衛に伴われて、気づかれることなく背景に姿を現す。」

さあ、私は

スペインから離れなくてはならず、父上に

再び会うことはないのでしよう——生きているうちは二度と。

あの方をもう尊重いたしません。わたしの胸の中で自然の摂理は死に果ててしまいました——あなたは、

再び、あの人の良き妻でいてください。あの人は

息子を一人失いました。あなたの義務に

戻ってください——私は、暴君の手から

苦しめられている民たちを救うために、駆けつけるのです。

マドリードは私を、王として見るか、さもなくば二度と見ないでしょう。

今、最後のお別れを！

「彼女に口づけをする。」

王妃

私に何をお望みなのか？——私は

ああ、カール様！

こんな男性の尊大さに興奮してはいけないのだわ。

しかしあなたのことを理解して、称賛することはできます。

カルロス 私は強くはありませんか、エリザベート様？ あなたを腕に抱きしめますが、ふらついたりはしません。

私をこの場所から、昨日のうちに、

死の恐怖が引き離したりしなければよかったのに。

「彼女を放す。」

過ぎたことです。今は、死すべき定めのある者の

あらゆる運命に逆らいます。私はあなたを抱きしめたが、

動揺したりしなかった。——し！ 何か聞こえませんでしたか？

「一時の鐘が鳴る。」

王妃

何も聞こえませんが、私たちに別れの時を告げる忌まわしい鐘の音の他には。

カルロス

それではおやすみなさい、お母様。

ヘントから、私の最初の手紙を受け取ることになるでしょう。

私たちのかわりの秘密が、

露呈してしまいますが。ドン・フィリップ様と、

公の場でやり取りすることになります。

これからは、私たちの間での秘密は

もう無いようにしたいです。あなた、世間の目を

避ける必要はありません——これが、私の最後の偽りに

なりますように。

「彼は仮面を取ろうとする。王が二人の間に立つ。」

王 お前の最後の偽りだな！

「王妃は気絶して、倒れる。」

カルロス 「彼女に急いで駆け寄り、腕に抱きとめる。」

彼女は死んでしまったのか？

ああ、天よ、地よ！

王 「冷たく、静かに、異端大審問官に向かって、」

枢機卿殿！ 余は自分の

やるべきことをした。あなたは、あなたの仕事をしてくれ。

「退場する。」

完